
アロア戦記

どらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アロア戦記

【Nコード】

N4914Y

【作者名】

どらら

【あらすじ】

小さな世界に産み落とされた少年。そこは赤く染まった果てしない戦いの世界。少年はその世界の中で何を見つけるのだろう。

初めての投稿です。気軽に感想を入れていただけると励みになります。

序章 そんな小さな想い、の物語（１）

・そんな小さな想い、の物語

遠い遠い、ある日の夜明けの事。

「何ものをも通さぬものとはこのことだろう。」
はるか遠い暗闇の外にかすかに光が漏れる。

闇に幾ばくの不安も無く、暁にどれほどの喜哀もない。

ただ、今日の日はまだ見ぬ日を想おう。

ただ、明日の陽と降り注ぐ光が想い以上に広大な事を、とどめる事無く白色である事を願おう。

「明日」に想いをめぐらす事は常であつた。それを夢想すること
で今の自分の存在と可能性を求められた。数年ほど前はそんな場
すら与えられなかった。

「明日」があることすら奇跡であつた。

今日、いや、今があるのは一瞬前の自分がいたからである。今いる自分は一瞬後の自分を存在させる可能性でしかないのだ。その無数にある瞬間の狭間の一つに今日と明日、今日と昨日をまたぐものがあつたに過ぎない。

無数の奇跡の末に今日の自分が存在し、無数の奇跡を願わなければ明日の存在を夢想することすら叶わなかった。

それを想う間も与えられなかった男は、ただ今の自分を存在させることに専念した。

それから、１３年が経つた。

日々に「常」なるものを見つけられる事は喜であつた。そして、それを奇跡にも神にも願わずとも思えることが自分の存在でもあつた。

だが、目の前の暗闇は男から「常」なるものを奪い取った。

汗ばむ手が男をあの十数年前へと押し戻していく。

彼から奪い取る「時」は暗闇から溢れ出すだけではない。夢想したはずの暁の朝にも、それは自身を広げて行った。

不意に「時」が男の瞬間を奪うこともあるが、男が自らその「時」の中に足を踏み入れる事もあった。

どちらも男の願うものではなかったが、そのどちらも男が願うモノには必要な「時」であった。男は願いもしないが拒みもしない。

喜は無く哀はあるが見続けることを否だけで終わらせはしなかった。そして、今の「時」は後者である。

産毛から伝わる闇の深さが夢想の存在を遠くへ追いやり、瞬間のみに男の居場所を用意したのだった。

「明日はミリイが飯当番だったなよな？」

ただ、奇跡の先を言葉にすることだけは許してくれるようだが、夢想の味を僅かばかりにもじませていない言葉は闇に溶け込むには調度良かった。

「ああ、そうだったな。ミリイの飯はあまり上手く無いんだけどな。」

だが、返って来る言葉は喜びも暖か味も含む余地を含んだ言葉だった。

人の言質の奥まで見抜く事に限りがある事は理解しているが、この返信の声に思いをめぐらす作業に時を費やす事は神も許してくれるのではないのか。

「なあ、そろそろその明日になるぞ。」

再びかけられたその声に導かれるまま首を左へ向けると、暗闇の空間を少しずつだが押しやるように光が漏れ出していた。

「ああ、明けるな。」

言葉だけの同意を漏らしながら闇を侵食する光に目を慣らす作業を急がせた。

完全な夜明けまで後１ルム半程だろう。

日の変わり目は喜びをもらす。たとえそれが悲しみの中の代替時期でありとうと喜々を与えてくれる。

今はその喜々の中に身を漬すわけにはいかない。ただ、身に瞬間を乗り越える奇跡を与える光を呼び込むことのみが、今の彼には必要であった。

「さて・・・行くか。」

数秒をかけた一言が間に転がされた。

闇より光が空間を支配しだしたのを見極めたのであろう、吐いた言葉と同様の間を持って体躯を上方へと持ち上げた。

眠気の誘惑から逃れられないのか、単に動作の感覚が他人より緩慢なのか、男の横に座り込む巨体はまだ陽と地の間隙に視線を貼り付けている。

「カルツエル。」

その言に、ようやくむやみな巨大さを持つ身体は動き出した。

「ああ、わかつてるって。」

この大男は自らの名を告げられなければ、吐かれた言葉の着地点が自らである事すら理解できないのであろうか。

「ハムサン。」

次に呼ばれたのは先ほどよりも遠い場へ身を置いていた者の名だった。その名の者、ハムサンは先のカルツエルと呼ばれた者に比して小さな体格であるが、それに反比例した速度をもって声の元へと参じて来た。

「ペイジュエ公に出立するように伝達を頼む。」

参じた者を撥ね返すかのように令が下された。だが、彼へと向けられた言葉は「はい」と、最も短い言葉の部類であろう返答を生み出し、再び彼を先程より遠い場へといざなった。

「行くぞ。」

三度目に投げかけた言葉は、その対象を無数に増加させたものだった。その言葉の浸透と同速度で無数の対象の中に一律な音が鳴り響いた。声による返答を求めない言葉を吐いた男と同様の高さへ数

百に上る視線が持ち上げられた。

陽を背に男は進みだした。

汗が微かにひいた手が重みを増した剣柄へとかけられた。

「アロア。」

男の背を微かに引き戻す作用を含んだ声がかけられた。

「不味いかもしれないが、ミリーの飯を楽しみにしような。」
場に馴染む努力を忘れた声がカルツェルの口から流れた。

「ああ。」

短い答えが背後にではなく、前方へと投げ込まれた。

序章 そんな小さな想い、の物語（２）

「眩しいな。」

その、ひとときわ高い身体を強調するかのように背伸びした視線が、ようやく全身を表した朝日へ向けられた。

だが、残念な事に彼以外（おそらく全ての者）の視線はそれとは全く正反対の方向へと投げかけられた。そして、まるでいつもの事のように彼らはその大男の言葉の存在を無視して話し出す。

「やはり、イメラタの方が僅かに多いかな。」

陽遮る森を抜けた先には山と谷、川に囲まれた草地が広がっていた。普段は生あるものたちの安息地になっているであろう、その草地を人はランタンと呼んでいた。

それは特に地名と言う程の冠ではなかったが、ランタンと言う赤く甘い果実を実らせる大樹がその草地のちょうど中央に根を張っていたため、土地の人に便宜的にそう名付けられた地であった。

アロアらが森を抜けたその場所は敵陣を一望できる丘の先端であった。

本来彼らが配置された場所は今いる場所よりもう少し北西の川岸の地であった。

「・・・本来、地の利は我らにあるはずなのに何故その地の利を使いませんのか？ いや、むしろ、この陣営では地の利はイメラタにくれてやるようなものではないですか。」

その怒気、呆れ、失望、あらゆる負の気に満ちた言葉を吐いたのは今から１０ルムほど前、夜の暗さが増してきた頃であった。

アロアと対面する男の間には即席と一目でわかる、布に描かれたランタンの地図が広げられていた。

「しかし、な・・・。アロア殿、これは王が決められたことなのだ。もう覆りはしない。ましてや、もう軍は支持通りの配置へと動

き出しているのだ。」

「しかし・・・。」

苦虫を噛み殺したようなアロアのうめき声が流れたが、目の前の男は目を閉じ眉間にしわを寄せることのみで敢えてこれを黙殺した。アロアにもそれは分かっていただのだ、もはや止める事など出来はしない事を。だが吐く事によって多少なりとも負の気持ちとを和らげ、いや、それ以上に目の前の男より些少でも軍の動きに影響がある言が王まで伝わる事を期待したのかもしれない。軍は止まらずとも心構えは今からでも備える事が可能なはずなのだ。

（そこまでは流石に無理か・・・ペイジユエ公も貴族の一人には変わらないのだ）

幕から遠ざかりながら心の中で嘆息した。だが、アロアにもそれは分かっていたのだ。ペイジユエ公が自らの話を耳に入れてくれるだけでも感謝すべきことを。普通ならば、他の貴族・諸侯ならば会話を交わすことも彼の意にならぬ関係であつたのだが。

仮にペイジユエ公がアロアの言を入れ、王にそれを伝えた時、王の不快を買うのは公自信なのである。さらにアロア達、傭兵紛いの者らの言により貴族が動いた事が知れば王の不快は更に深刻さを増すであろう。

少なくとも表面上は自分たちと快く会話を交わしてくれ、彼らとペイジユエ公の隊の行動に対する、アロアの進言をこの先聞き入れるとさえ言ってくれた公に、危機を助長するまねを強要する事は出来なかった。最も、強要しようものなら拒絶され、アロア等を卑下する態度を表面化した挙句、アロアらの隊を危地へ投入しようとするかもしれないが。

「いいか、今、赤い旗を掲げている隊がいるだろ？」

アロアの声が彼の周りに集まった仲間2人へと投げ掛けられた。彼らの視線は言葉の中にあつた通り赤い軍旗が数十本、風に靡いている地点へと集められた。

「ああ、いるな。」

短い答えがアロアのすぐ傍から返された。妙に目の細い男であった。「妙」と言うのは彼が普段から意識的に目を細くしている風があったためだ。目が悪く凝らしているだけとも思えるが、前にアロアがそれを尋ねてみると、微かに不審な顔をして「いや、生まれ付き目は良い方だ。」とだけ言う足早に遠ざかって行った。

だが、目が細いのは生れ付きでは無い事は分かっていた。試しにこの男に酒を飲まし理性を外してみると、目を見開いて騒ぎまくるのだ。アロアの中での永遠に解けないであろう疑問の一つだった。彼は名をムリエラ「カサドラと言う。

「あの地点だ。俺たちが目指す地点だ。覚えておいてくれ。」

アロアの静かな指示だった。

だが、その静かなはずの言葉はそれを受けた者達に大きな反響を呼んだ。

「な!？」

第一声は皆ほぼ同時、同様のモノだったがその後続く言葉を吐いたのは先ほどの目の細い男だった。

「おい、アロアわかつているのか？」

大半を非難色に染めた問いかけだった。

「わかつてるって？」

非難の対象からの、惚けた顔と惚けた声。

「あれは、あの赤い幟はイメラタ本隊の軍旗だろうが。」

「ああ、そうだな。」

ムリエラのその熱した吐息を完全に無視したかのようなアロアの返答。

「あそこに突っ込むつもりなのか？」

「ああ。」

再び同じ声色がアロアから漏れた。

「『ああ』ってな……。」

微かに嘆息したような声を漏らしたムリエラは、その煮えきらぬ

表情をアロアから眼前の赤い旗の靡く一帯へと向けた。

赤い旗の下に集まった隊は少なく見ても1000人は下らない騎士と従者によって構成されていた。彼らの隊の20倍はいるであろう。そして、アロアらとの違いを最も表現するものとして彼らを構成する人の、正式な「騎士」である事が誰の目からも窺えた。イメラタ族と言う、アロア等とは違う主従環境において「騎士」と言うものが存在するのかは判らない。だが、目の前の隊がアロア等の中で「騎士」と呼ぶに相応しい者等である事は確かだった。それを確かにさせたものは彼等の大半が煌びやかな甲冑に身を包んでいると言う事もあったが、それ以上に1000人からなる隊の内馬上の者の割合が通常の隊より極端に多い事がその確信の根拠となっていた。アロア等とて馬は所有していた。だがその頭数は僅かに7頭である。しかも、戦力としての馬では無く、運搬を主な役割としている馬たちだ。よって戦力として纏まった物になりえないその馬達を、当然彼らは今日この戦場に連れて来てはいない。だが、眼下の大隊はその2割以上までもが騎馬なのだ。アロア達とは違う、戦力としての騎馬である。

「……理由は聞かせてもらえるんだよね？」

序章 そんな小さな想い、の物語（3）

朝靄がかかり始めたランタンと呼ばれる直径2・5ラス（1ラスは約1・2?）ほどの楕円形の草原はその北西から北東にかけてなだらかな川が横切る穏やかな地である。平地の真ん中に大樹が一つ立つのみのその光景は平穏な地そのものであったが、それはここに人の匂いがほとんどしないからなのかもしれない。南北に、大して整備もされていなく獣道とも見紛う様な街道が一本走っているが、この様な地にはあるはずの人々の集落も農地もここにはなかった。だが、それを不思議と感ずるのは遠い地より突如としてこの地に舞い降りるかの様な奇特な経験ができた者だけかもしれない。

ランタンを挟んで街道の南北各2・5ラスほど進んだ地には人の里があつた。ランタンを、地を足で踏んで訪れようとする者は必ずその里のどちらかを通る事になる。そして、その地よりさらに北もしくは南に良く事無く引き返すことになるのだ。いや、もっと正確には、そもそもこの地域の者ならば里よりランタンを通って先へ行こうとは里に来ずとも考えもしなかったであろう。

ランタンが中心に置かれた地図があつたならば、地図を覗く視界をランタン一帯から徐々に離してみる。まず目に付くのはランタンの北側鬱蒼と茂る森が続く小高い丘だ。その昔、ここに葬つたと言われる者の名をから、【クエルランス】と言う名がその地には付けられている。そして、そのクエルランスを北へ下った場所に千数百の人の群れが見える。一段には無数の軍旗が掲げられているが、旗には「聖・フィガロ」と刺繍されている。

更に視界を広げていく。南北に途切れ途切れに見える街道意外は森しか見えなくなつたが、しばらくすると北側に主規模の人の里が見えた。もししばらくすると南側にも里らしきものが確認できる。これが先ほどのランタンを挟んでもっとも【近所】となる人の生息地なのである。

そこから先には南北どちらにも人里が散見できるようになる。どうやら、ランタン一帯のみが人の無生息地帯として取り残されたようだ。

ランタンの北側を縦断していた川はその後大河と合流し、海洋へと流れ飛んでいる。

ここまで来ると人里も点となつてしまい確認できるのは川と森と山、そして海洋だけとなつてしまったため、ここで神のみが語れる視点はいったん役割を置くことにする。

だが、この視点からもわかるように、ランタン・クエルランス一帯を空白地帯として南北に人里が分断されているのは、何もこの地に人を寄せ付けに魔境がある訳ではない。ましてや自然による影響などでもない。

そこに住む人、そのものが原因となつていた。

合わせて50ラス程も離れた地に住む人々はお互いほとんど会話を交わした事が無かった。言葉が通じない訳では無い。この大陸ガドウルムに住む者も外地に住む者も、人の使う言葉は単一なのだから。

ただ、彼らは掲げる神が違った。

そう、互いに言葉すら交わさない理由はただそれだけなのである。しかし自らの信じるモノを信じる事が出来ない者達を、彼らは認めることが出来なかった。自らが信じるもの以外を信じると言う事、それを許容することなど出来なかった。

まだ見ぬ神は、見ることも触れる事もできる人の生より重いのだ。そして見えぬ神を否定する者は、互いにとつて「ヒト」では無いのである。

チュアー二教の掲げる神「フィル・グラウシエラ」を信じるフィガロ王国と、バウと言う、海を隔てた南西の大陸に勢力を誇る大部族の一派であり、その地域で信仰の熱い「シュエラ」神を崇めるイメラタ族では肩を組んでの平和など許容しようが無かった。

相容れぬものは「神」だけなのだ。だが、それが互いの全てを相

容れぬものにしてしまっているのだ。彼らの掲げる「神」は自らを信じる者以外には救いの御手を伸ばさない程、小さな度量なのだろうか。

その、互いに人では無い者同士の戦闘の地に今回選ばれたのが、ランタン・クエルランスなのである。

十数年前までは70ラス程北東の地が彼らの憎しみの地になっていたが、徐々に南西へ移動し、現在はこの地に互いの憎しみをぶつけていた。

そしてそう遠くない未来に、再び悲しみが、狂喜が、この地を覆うのだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（４）

ムリエラのその声はさすがに重みを持って吐かれた。

彼らを率いるものを信頼していないわけではない。だが、彼らとてその手に多くの者たちの生命に責任を持つ身なのだ。自らのアロアへの信頼を下の者たちにまで押し付けるほど、アロアの発言は無視できるものではなかった。

「ああ。」

アロアにもそれはわかっている。

だが、彼らに不審がられる程の大胆さがここには求められた。

「時間がない。端的に話すぞ。」

カルツエル、ムリエラが同時に頷く。

「イメラタの軍は目の前の本体を中心に左右と前方に軍を展開している。本体の軍がおよそ１０００、左が２０００で右が１０００、そして前方に張り出しているのがおよそ２０００だ。合わせて、６０００つてとこだな。前に話にあつたイメラタ全軍とほぼ同数だ。恐らく別働隊、伏兵はいないと思う。左軍の方に厚みを持たせているのは、右側が広陵になつていてためか、主戦場を左軍側と考えたからだろうな。ま、正攻法と言ったところだ。」

三人の中心の土面に小石を使って、アロアは敵軍の陣形を作つていった。

「対してフィガロ側だが・・・。」

（本来、これはランフアン役割なんだがなあ。）

今はペイジユエ公の軍へ連絡役（指南役）として部隊からは離れている色白の男へと、心の中ではあるがちょっとした愚痴をこぼした。今アロアが話していることは、そのまま昨日、その色白の男がペイジユエ公の面前で話したことの繰り返しであった。

「王を中心とした本軍が約３０００。前方へと張り出した軍が左

に1000、右に1000。」

先ほど置いた小石と微妙に色合いが異なる石が3つ並べられた。

「昨日までフィガロ軍がいたのはここ、クリアランスの丘だ。だが、今朝までに全軍はその丘を降りてイメラタ中央軍の全面へ出てきている。」

置いたばかりの3つの小石がすつと動かされた。

「待て。なんでフィガロは丘を降りたんだ。」

ムリエラから、その小石の動きを制する声が上がった。恐らく、最初にあつたアロアの「時間がない」の一言があつたためだろう。発言を控えようと努力をしていたみたいだが、この小石の動きには疑問を挟まずにはいられなかったようだ。

まだ若い彼にも、広陵に陣を構える事の優位性は認識できたのだ。「イメラタの主力が左側へ集中しているからだそうだ。王は今回の戦いをイメラタへの決定打にしているから考えている。だからこそ、早い段階で主力同士の戦いで決着をつけたい。そのための敵主力前方への移動だ。」

「な・・・っ。」

そのムリエラの驚きの声も、そう遠くない過去で聞いた覚えがある。

アロア自身が、ペイジユエ公に対して吐いた響きだ。

「敵に合わせて軍を動かして、そして優位な地を捨てたのか？数で劣っているのにその様な事をして何の意味があるんだ？」

「・・・意味か。そうだな・・・敵が丘を登って来るのを待つてなどいられない。こちらから仕掛ける事で主導権を持てる。正面から敵を撃破してこそその戦い。主力同士の決着こそが聖戦にふさわしい。そんなところが意味じゃないかな。」

ムリエラの疑問に対してこれほど不真面目な答えはないのだろう。そして、ムリエラもあまりに不真面目な回答に二の句が告げられなかった。

「王は信じているんだよ。今回の戦いの勝利を、神に祝福された

軍が負けるはずがないことを。そして、その軍が個々の力において蛮族に劣るわけがないことを。」

繋がらない二の句の代わりにアロアが言葉をつないだ。

こうでも言わないと、アロア自身の気も収まらないのだ。ペイジユ工公の眼前で晴らせなかった鬱憤を、開戦の間際になって心許せる仲間の前といえども吐いてしまうのは、まだアロアも若さゆえのものがあるのだろう。

だが、それはムリエラに二の句を吐かせる機会を作らせてしまった。
「あのなあ……。」

そのため息にも似た嘆息には、鬱憤を吐かざる負えないアロアへの同情と、その状況を甘受せざる負えない自らの状況への嘆きが見て取れた。

「イメラタが蛮族か何かは知らないが、一対一なら勝てる可能性は半分だし、二対一なら可能性はほとんどなくなる。喧嘩は相手が蛮族だろうと、神の祝福があるうと法則に変更は無いんだぞ。」

「王ほど高貴な方だと、喧嘩のような、蛮族のするものはされた事がないんだろうさ。」

せめて嫌味の一つを言いたくなるのも若さのせいだろうか。

「……まあ、もういいさ。どちらにしても今更どうしようもないのだろう。話を進めてくれ。」

どうもこのムリエラは、アロアよりは若さゆえの愚痴は長く続かないみたいだった。

それとも、アロアの表情からこの手の鬱憤が自分よりも多大に、眼前の者の身の内に溜まっていることを悟った事からの配慮だったのか
「ああ、すまないな。」

さすがにアロアも、これ以上愚痴に時間を費やしたくはなかった。

「ムリエラの言うとおり、数の上で言えばイメラタの優位が残ったまま、今の陣形ではこちらに地理的優位は無くなったことになる。」

アロアの手がイメラタを想定した小石の一つに触れた。

「さらに、イメラタはこの右軍、1000を遊軍として使える状況になった。」

その小石がゆっくりと前進する。

「恐らく、この軍はそのまま前進するだろう。フィガロが去った、このクリアランスの丘に。」

小石の前進が止まった。

それを見るムリエラの表情が険しくなる。

アロアにも彼の表情の変化はわかった。

「そう、ムリエラが想像する通りだ。これでイメラタは数の優位性に続いて、地理的優位性も持つことになる。」

止まった小石がまた動き出した。

「そして、この丘の上にたどり着いた軍はそこから丘を駆け下りるだろう。主力同士がぶつかり合う、フィガロ本体の左わき腹に・・。」

小石が色の異なる石にコツンとぶつかった。

その様を男たちは静かに見守った。

「この戦は、負けか。」

半分ため息交じりにムリエラがつぶやいた。

「ああ。このままだと決定的打撃を受けるのは、イメラタではなくフィガロになるだろうな。」

「イメラタの右軍が来るまでに決着をつけてしまう事は難しいか？」

もう頭では分かっているのだろうが、ムリエラは聞けずにはいられないと言った感で声を発した。

「そうだな。数ではフィガロが5000、イメラタが4000で前線の戦いだ。しばらく有利に進むのは確かだろうな。」

はたしてこれと同じ議論が王の御前ではなされなかったのであるうか。

『聖戦』と言う言葉はそれほどまでに将達の判断を鈍らせてしまうのか。それとも王の御前と言うのは誰もがもの言えぬ木偶となっ

てしまう空間なのか。

「だが、その差はイメラタを瞬時で壊滅させられるほどの差じゃない。それに、フィガロ全軍を指揮するのは王自らだ。」

「王が自らか？」

もう何度目だろうか。ムリエラの表情に、数ルム前の自分の表情を重ねてしまうのは。あの時対面していたペイジュエ公は、どのような思いでアロアの表情を見ていたのだろうか。

「ああ、軍議でそうなったそうだが、王が戦術と指揮に長けているとは聞いたことが無い。聖戦と言う事で出張ってしまったのだろう。まあ結局は、逆に大した命も下せず、判断できず、前線を混乱させるだけなんだろう、な。」

敵も族長が出てきているのだ、王自ら出ないで軍の士気など保てるものか。もし、フィガロ王に寄った見方をするのならこう抗弁するのもかもしれない。だが、あの王に、弁護されるだけの資格と能力を有しているとはアロアにはどうしても感じられなかった。

「だから、下手をするといメラタは右軍の投入が無くても逆に優位に戦いを進めてしまいかもしれない。」

「その上敵軍にわき腹を突かれてしまいか・・・。」
昨日同様の説明をしたモース公も、結局はフィガロ王に何の進言もしなかったのだ。フィガロ本体の動きは、その予測できるであろうイメラタの動きに対して、何の対抗手段もうつていないだろう。

「どうすんだ、アロア。」

視線は厳しいまま、ムリエラはアロアへ言葉を投げた。

だが、ムリエラの声色は途方に暮れてはいなかった。

それは、この状況を認識した上で軍を動かした団長への理解であり、信頼からであろう。

そして、アロアもまだ状況に絶望はしていなかった。

「勝たせるさ。フィガロを、な。」

口端が少し上がった表情を連想させるような、答えだった。
多分に高慢ともとれるほどの自信が、その言にはあった。

フィガロ全軍の100分の1程でしかない軍の指揮官に過ぎない者が、軍全体の運命が自らの手の内にあるかのような言を発するのだ。高慢以外の何者であろうか。

その、高慢なる者の右手が動いた。

「俺たちが初め、王に命じられた配置はここだ。」

フィガロを示す小石の中で一番大きな一つを指差した。

「軍主力の左側だ。まあ予想通りに行けば最初に攻撃を受け、壊滅か、運が良くて王を逃がすための捨て石になる運命、の配置だな。」

アロアの指が小石をコツコツと叩いた。

「だが、こんなところで捨て石になる気はない。しかし、捨て石にならない方法と言うと敵前逃亡しかない。」

「・・・それは難しいだろう。」

ムリエラもその小石をじつと見つめる。

「ああ。主力の軍において敵前逃亡自体が上手くいくとは思えないし、何よりここで敵前逃亡しては、雇われ部隊としての俺たちの今後の運命は潰える。」

それだけは避けなければならない。彼らが彼らの『一団』にかけるとは、敵前逃亡のような小事で終わらせられるほど軽くは無いのだから。

「とすると？」

少しせかせるムリエラの声。

「前提を覆すしかない。この戦に勝てば捨て石は元より、敵前逃亡もしなくても良くなる。」

小石を叩く指が止まった。

「それはそうだが、その方法は？」

恐らくムリエラの気が短いのではないだろう。例え誰であろうとも、自らの運命を決するものに対しては、判明までの時間を限りなく零にしたいものだ。

「敵に学ぶんだよ。」

アロアの指が小石を叩いた。指で小突いていた石では無く、先ほどその石の脇まで移動させた、イメラタの別働隊を模した石だ。

「俺たちもイメラタ本体の脇を突く。」

いつの間に手の内にしていたのであろう、今までのより更に小さい石がフィガロ本体を模した石の脇に置かれた。そして、素早く反時計回りに前進し、イメラタ本体の石にあたった。

「それが今の俺たちか。」

「そうだ。」

ムリエラの言葉に、アロアが頷いた。

「だが……。」

しかし、それを受けて出たムリエラの言葉は否定と疑問を表すものだった。

「かなり数の力が足りなさすぎるんじゃないか。俺たちは50人程の戦力しかないんだぞ。目標のイメラタ本体は1000。この戦力差は厳しいと思うが。」

最もな分析である。そして、その最もな分析は更に補足した。

「敵に学ぶと言ったが、イメラタの遊軍は、1000でフィガロ本体の3000を強襲すると言ったものだろう。相手の3分の1だからこそ効果があるのだろう。それが20分の1だと効果らしきものがあるとは思えないぞ。」

そう、先ほどムリエラが言った喧嘩の法則はフィガロ・イメラタに限って適用されるものではない。彼らもその対象なのだ。

しかも、これが20倍の敵相手となると、さすがに個々の能力差では到底埋められるものではない。

「そうだな。確かに俺たちがこのまま敵本体へ突入しても、効果の範囲は限られるだろう。だが、それは正攻法で行った場合だ。相手の機をつき、上手く立ち回れさえすれば、例え20分の1であっても、一瞬の衝撃を与えるならば俺たちでも可能だ。」

「……可能か？」

「ああ。今のところ俺たちの動きはイメラタには伝わってはいな

いだろう。本体が大きな動きをあからさまにしてくれているのが、ここでは良い隠れ蓑になっている。」

少し皮肉が込められていた。いや、わざと込めたものだろうが。

「そう、王の判断が逆にこの策を可能にしたって事だな。」

昨日の夜に行われた本体の移動の間に、アロア達の隊は本体から4ラスほど離れた地へと移動していた。そして、朝もやの僅かな光を手掛かりに、イメラタ本隊が見下ろせるこの地へやってきたのである。

刻一刻と変わっていく状況、それにどう対応するかで戦の勝敗はどちらにも転ぶものなのだろう。アロアが出来うる事はここまでの限界であつたが、もしこの戦場全体を把握できる情報を持ち、それを効果的に動かせる権限を持てたのなら、どのような指揮がとれたのだろう。まだ、アロアには単独で指揮した経験も権限もなかったが、この足枷が多い戦場の中でそれを夢想してしまう事は仕方ないことであろう。

ふと、アロアは今の空間がアロアとムリエラの二人だけのものになっている事に気が付いた。この会話には3人が参加していたはずだが、いつの間にかアロアとムリエラは二人向き合う形で話を進めてしてしまった。

そう思い、一息入れた話の合間に視線を三人目の男がいた場所に振ってみると、確かにその者はそこにいた。あまりに話に入っていないため、不在の可能性も頭をよぎってしまったが、さすがに戦闘直前のこの時にのんびり散歩などではなかったようだ。

では、アロアとムリエラの話を遮らないよう気を使っていたのかと思つたが、それがあまりに的外れなのは一目でわかつた。

「・・・カルツェル、まだお昼寝には早いと思うんだがな。」

つぶやくアロア。

「起きろ、カルツェル。」

そのつぶやきでカルツェルの不遜に気付かされ、先ほどまで自軍に模していた石を投げるムリエラ。

「痛つ。」

言葉ではなく、痛みで起きたカルツェル。

「なんだ、もう敵と当たる頃か。」

なんだかこの場に合っているのかいないのか、意味不明な返答が返ってきた。

「ふう。」

今度は二人同時に吐かれた、声になるため息。

「ああ。当たったよ。今、お前の頭にな。」

もう仕方がない気持ちを顔一面に出したまま、なんとか返答するアロア。

（信頼されていると・・・そう思おう。）

仲間への極端な性善説の採用。

（これが団長としての役割の一つなんだろう、な。）

この大男と付き合うと、考えさせられることが多くなる、

そして、その分だけアロアの長としての気苦労と、ため息癖が増えていくのだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（5）

「行くぞ。」

声が上がった。

「おうっ。」

それに呼応して無数の声上がる。できるだけ、声も動作も大げさに。それがこの作戦の第一の指令だった。

アロア達が現在の地に到着してまだそれほど時は経っていない。すでに戦いは始まっていた。遠く北の方向で開戦を知らせる銅鑼の音がしたのは、もう半ルム程前の事である。銅鑼の音色から戦いはファイガロから仕掛けたようだ。

あの王の事だ、はやる気持ちを抑えられず自ら出撃の合図をしたのだろっ。他人を死地に追いやる命令と言うのはこうもたやすく出せるものなのだろうな。そして、それが自らの関わることではない事を認識していたなら益々容易になる。恐らくは今頃戦勝の報告のみを期待して後方で、先ほどのカルツェルよろしく眠気と戦っているのではないか。

（その戦いこそが、王たる者の戦いなのかもな・・・。）

嫌味ではあったが、そう自らを納得させた。

だが、その王の決断は、アロアが立てた作戦には功を奏した。

思ったよりも早い開戦により、アロア達も出撃のタイミングを前倒しにしなければならなかったが、そのおかげでまだ晴れきらない朝靄が彼らの姿を多少なりとも隠してくれた。

イメラタ本隊の右後方より見慣れぬ軍隊が突然姿を現した。

それは、本隊後方に位置したほとんどの者が認識できるものだった。なにしろ、突然の雄叫びが上がったのである。誰もがそちらに目をやる。

考えた通りの効果だった、まず敵全体の注意をこちらへ向けるの

だ。

それには成功したと言えるだろう。アロア達が敵前面へと出たときに、こちらへ目をやっていない者はほとんどいなかったのだ。どの敵兵とも目を合わすことが出来たのだ。

（有名になるとこんな感覚を味わえるんだろうかな？）

走り出しながら、そんな事を考える自分を変わり者だと感じる事もある。だが、周りの仲間を見渡せば、いかに自分が普通の人間かを身につつませられる気もする。本当にこの仲間という空間は貴重なものだ。

だからこそ、こんなところで終わらせるわけにはいかない。

「ドカツ」

何かが大きくぶつかる様な音がする。

軍と軍がぶつかるのだ。互いに必死に駆けて行く先の衝突になると、その衝撃だけで人を死に落とすのは簡単なものだった。

だが、今回の音は通常起こるはずのそれとは違った。

アロア達と最初の接触となった、十数騎の騎士とそれを支える馬たちが雪崩の如く倒れていった音である。

そして、それを起こしたのは先ほどまでは睡魔と闘い今度はイメラタ族と闘う事となった、闘い続きのカルツェルであった。

まずは馬を狙え。

これが第二の指令。

たとえ顔と視線はアロア達へ向けられても、騎乗の者たちがすぐに馬と共に方向展開を出来はしない。だからこそまずは馬を狙った。そしてその役割をカルツェルに託した。

一人だからこそ虚を付く攻撃もできた。大勢が息を合わせると、どこかに遅れが出る。

とは言え、一人でそれを成せるのはカルツェルだからこそだった。凄まじい、の一言に尽きる彼の剣だった。数秒だったかを数える暇もないほどの瞬間と剣を振る速さ、それに斬ると同時になぎ倒す

効果も同時に出した剣力。それがおよそ常人には難しいことは、目にした者を即座に理解させられた。

だが、この指令は他にも多数の効果を狙ったものだった。

第二の効果。それは騎馬が崩れ落ちるというものは、遠くからでも確認できるほど派手なものだった。先ほどアロア達の発生に後ろを向いた、無数の視界の中で騎馬が崩れ落ちたのは戦果を実態以上に相手に印象付けられた。

イメラタ軍のあちこちで「敵襲」「方向転換」などの急を要する命が飛び交っている。

敵軍にこちらの奇襲へ目を向けさせる。アロアにとっての最初の目的はこれで達せられた。

しかし、実際にアロア達の攻撃を受け止めた部隊は違う印象を受けたであろう。

はでなカルツェルの攻撃に面食らったものの、その興奮から覚めてみると目の前には僅か50人程度の小部隊。更には倒されたはずの騎士達も次々に起き上がってくる。

馬を除けば損害はほぼ無いのである。

その無傷のイメラタ本隊に対するのは僅か50人の、そこらの山賊と見間違える程度の小部隊。相手の正気を疑う程の戦力差である。本隊の一部でもひと揉みにできるのは明らかだった。

一瞬の驚きが激しかった反動からなのだろうか、それに気付いたイメラタ後方部隊の反撃に対する気持ちは重かった。

「潰せ」「殲滅しろ」

先ほどの驚きからの命とは打って変わって、強気が前面に出た命が複数上がった。

気持ち一步後ろに引いていた兵達の、剣を握る手に力が入った。彼らの隊長たちの命が無くても飛び出す姿勢である。

だが、彼らがその最初の一步を踏み出そうとしたとき、別のところから命が下った。

「退却。」

その命の主は彼らの隊長ではない。

彼らへと無謀な突入をした小隊の中から出た声だ。

最初の一步を踏み出し損ねた彼らの前で、その小さな隊は小さいが故の長所を生かすかのように綺麗に回れ右をすると、来た方向と同じ場所を目掛けて走り出した。

機を逸らされた、正に「あ」と言う間もない逃走劇。だが、彼らの隊長も腑抜けで隊長の座に就いたわけではない。無謀なる小隊に一息遅れはしたが、すぐに彼らの部下に追撃を命じた。

アロアの先ほどの作戦の、第三の効果が表れたのはここであった。本来追撃で最も力を発するのは騎馬隊である。だが、先ほどの接触の際にイメラタ本隊でアロア達を追撃する位置にいた騎馬は、あらかた大男によってなぎ倒されてしまった。イメラタの本隊といえども、その中枢以外で騎乗のものはそう多く配置されてはいない。

更には騎乗の者はそれ自体が身分の高さの証である。つまり騎士階級なのだ。そして、イメラタ軍の構成は（イメラタのみでは無くフィガロも、この大陸のほとんどでそうなのだが）身分の高い騎士が歩兵数人を指揮する隊長の役割を担っている。

いくら歩兵と周りの隊長たちに追撃の意志が強くても、実際に追撃すべき歩兵の直接の指揮官がやっと起き上がりかけている状況では、十分な指揮はできず自然追撃も緩慢になってしまう。

結果、一瞬の喧騒が収まったその戦場では、十数頭の倒れた馬と地面に叩きつけられた箇所を痛がる騎士たち、それに奇襲に対する印象が残るだけとなった。

また、遠く北の方で戦闘の声が聞こえる静かな空間と時間が流れた。

急激な衝撃の後に訪れたこの時間の中で、イメラタ本隊の兵達は今の、あまりに意味不明な急襲について考える時間を持つことが出来てしまった。

序章 そんな小さな想い、の物語（6）

「恐らく、イメラタの騎士たちはこう考えるんじゃないでしょうか。」

色白の男はそうアロアに語った。

「なんだ、逃げ出したのか、と。」

男の口元がわずかにほころぶのがアロアには見て取れた。この者は自らの策がはまる可能性を見出した時、笑みが湧き出す。だが、大抵その表情が浮かび上がりそうな場合は戦の中となってしまうため、一応礼儀として笑いは堪えるのだそうだ。

だったらその口元のほころびも堪えて欲しい、とアロアは思うのだが、その表情が見えた時はアロアにとっても吉兆であるため、そう目くじらも立てられない。

「それは当然湧き上がる思いでしょう。何と言っても僅か50人での突撃です。普通では考えられない。」

（その考えられない事を作戦とは言え、俺たちにさせようとしているんだけどな。）

と、アロアは心で思っておくことにした。

「だからこそ考えるのです。多分奴らは自らの力を過信したか、イメラタ本隊の大きさも知らずに突撃してきた愚か者だと。」

「うん」と男は彼の考えに納得するそぶりを繰り返した。

「なんと言つてもイメラタにとっては私たちこそ蛮族です。元来蛮族とは愚かなものです。ならばそれに見合った行動をしてあげましょう。人は自らの見たいものを見、思いたいものを思うのです。」（少し哲学的な物言いだな。隣のミリイがあくびをかいたぞ。）

と、これも告げ口はしない事にした。

「愚か者で片づけられる。実に不名誉な事ではありますが、これは次の行動のためには実に有益な事になります。」

（そろそろ考えがまとまった頃かな。）

しばし時間を置いたアロアはそう語られた事を思い出し、落としていた腰を再び持ち上げた。

「んじゃ、また行くぞ。」

その声に男たちはやれやれと言いはしなかったが、行動にそれを全く隠そうとはしていなかった。

アロアはそんな彼らが好きなのである。例え戦場の中であろうとも人としての感情を豊かに表す彼らが。まだ若いのだ。何かを隠す術など、今はアロアに押し付けておけばいいのだ。

「そんな顔をするな。今度は本番だぞ。」

だが、長としては言わねばならない時もある。

「心配するなアロア。みんなわかつてるさ。」

そう言つて、彼らが長の肩をムリエラが叩いた。

「ああ。」

答えるアロアの剣が抜かれた。そして、前方へと振られた。

今度は先ほどの様な掛け声は上がらなかった。

「二度目の突撃は一度目ほどの騒々しさはいらないです。敵への印象付けは一度で十分。また来たかと片目で見てもらう程度でいいのです。」

再びイメラタ本隊の右後方へ出た彼らだったが、さすがに先ほどの奇襲のように驚きをもっては迎えられなかった。いや、逆に両軍がぶつかるまでに、こちらへ向かつて備えをとって迎えられた。

しかし、色白の男の言つた通りだった。アロア達へ構えを取つたのは一部、100人程度であつた。他の者たちは顔だけを右後方へ向け体はそのままか、それとも耳だけをこちらに向けているだけだった。再び突撃を行うアロア達を

「愚か者だと思つていたが、ここまで愚か者だと思わなかった。

と、もう私達への評価は完全に地に落ちました。」

と、言う思いで迎えたのだろう。

それは備えに出た数だけでなく、その対応にも見て取れた。通常戦闘の前には敵戦力をできるだけ削ぐために、両軍がぶつかる前の段階で弓による攻撃が行われるのだ。前の突撃は奇襲だったため、それが無かっただけである。

だが、評価を地に落とした者たちへ弓で迎えるのは非礼と想ってくれたのか、イメラタは常套であるその行為を怠ったのである。

さすがにこれは色白の男も予測できなかった副産物である。

逆に今度のアロアの攻撃は先ほどとは違った。

「弓隊、打て。」

聞きなれた声が上がった。

50を大きく超える本数の矢が空へ舞いあがったとき、今回は見られなかった驚きの表情をイメラタ軍に見て取ることが出来た。

「これがイメラタにとっての最初の驚きになります。」

完全に教師の体である。アロア達に対しだけではなく、貴族であるペイジュエ公の前においても、この男の口調に変化はなかった。

「この弓隊のタイミングについては、私たちの隊と機を合わせなければなりません。大変恐れ多いのですが、この弓隊の指揮については我が軍のラターファに取らせていただいて宜しいでしょうか。」

「・・・う、うむ。」

この教師口調の前に、ペイジュエ公も気持ちを押されているようだ。

「恐れ入ります。しかし、彼らにとって驚きはこれだけでは終わりません。これから驚愕のみが唯一の感情になってもらうのですから。」

ちよつと言い過ぎの感がある男の指が二本上がった。

「二度目の驚愕はそのすぐ後に起こります。」

序章 そんな小さな想い、の物語（7）

弓隊による驚愕の中、半数は戦闘不能になり半数は混乱の中にあるアロア達に対した軍は、容易に本体内への敵軍侵入を許してしまった。

「今です。」

戦場でも同じ口調を発する男の声が上がった。

そして、それに促された声が、少々緊張を帯びながらも痾高く上がった。

「・・・、展開せよ。」

だが、よく通る声だった。

「展開だ。」

「左に展開せよ。」

「右方の敵に備えるのよ。」

それに応えるかのように、各所で隊長たちの声が上がった。

一塊で動いていた軍がいくつかへ分散していった。しかも、数人での分散ではない。各々30～50人程度の規模を持った隊での分散だった。

敵本隊旗までは、まだ300レス。

「そう、これが二度目の驚愕となります。」

色白教師の講義はなおも続く。

「一度目の突撃から撤退へと続いた時に打った布石は、この時に最大の効力を発揮します。一度目の突撃の折が50人程度の部隊だったため、二度目も同様と勘違いを起こします。」

誰へ向かってか、少し首を左右へ振った。

「本来なら良く注意を払えば、そう簡単に、気付かないなどと言う間抜けな事態は発生しません。ですが、我らの事を間抜けと侮っ

た敵は、今度は自らが間抜けな事をするのです。感覚による認識を、実際の目で見える認識より優先させてしまうのです。」

その時は、そう上手く物事が進むのかと思ったが、なるほど、敵の驚愕のさまを見る限り当たっている。

「それは驚愕もするでしょう。ちょこまかとこ五月蠅い部隊が、分散すると言う愚をまたしても犯した。それなのに、分散したはずの各隊の人数が大して減っていないのですから。」

確かにアロアらの隊は50人そこそこであり、その数の制約はどうにも短期間では変えられないものである。だが、ここにはアロア以上の力を持った者、貴族がいる。

「ペイジユエ公の率いられる軍は200人以上の規模を誇ります。我らと合わせた場合、一回目の突撃の5倍を優に超える戦闘力となります。」

しっかりと今回の作戦のパトロンを持ち上げる所は、一介の教師ではない面も見せつける。

5倍以上の戦闘力は明らかにお世辞であろう。貴族に率いられ、安全な地を渡り歩いてきたであろう軍に対し、各地の戦場のしかも最前線を経験してきたアロア達の軍が劣っているとは、どう鼻屑目に見ても難しかった。むしろ、1000対50ではさすがに勝ち目は無いが、ペイジユエ公の率いる200人が相手であればアロア達は負ける気がしなかった。

だが、この時点においては戦闘力の必要性はそう高くは無いのである。敵を混乱させる軍の規模こそが必要なのであった。

そして、ペイジユエ公の軍にはその規模の他にもう一つの魅力があった。

「ぐわぁーん」

銅鑼の音が突如として混乱する、イメラタ本隊の後方で鳴り響い

た。しかも一つではない、複数、いや十数の銅鑼が一斉に叩かれたのである。

耳を引き裂かんばかりの音だった。

（これは堪らんな）

暴風のようなその響きに、ムリエラもしかめる表情を作らざるおえなかった。

（知ってても驚いちゃうよなあ。知らなかったら・・・）

と、その不幸にも知らない者たちへ目をやった。

（この男には演技力と言う才能もあるのだろうか。）

まだ見ぬ敵兵への同情に満ちた顔を、その男は見事に演じていた。

「そう、ここで突然の銅鑼の音。予想もしないものを耳元で、しかも大音量で聞かせられた人はどう思うでしょうか。恐らく思うことすら難しい程に混乱してしまうでしょう。可哀想な事です。」

本当に同情しているのか、そこまでは見抜けないのだが。

「これが第三の驚愕です。そして、これにより二つの道が開かれます。」

ピンと二つの指を立てて見せた。すでに日も落ちた空の下では、隣を歩くアロアにしか見えないのだが、彼にはそれで十分なのだろう。

その指が一本だけたたまれた。

「一つ目はイメラタ本隊後方の、私たちに対していた者たちの動きを、一瞬でも止める事です。私も、銅鑼の音は何度聞いてもうるさくて敵いません。この三度目の驚愕を至近距離で受けたのなら、彼らの動きにある程度の影響を与えるのを予想するのは難しくありません。」

「そうだな。」

軍に籍を置いたことがあるものなら誰でも知っているだろう、その音量を想像し、アロアも確かに頷いた。

「二つ目の効果ですが、それは今まで後方部隊しか払っていなか

ったであろう私たちに対する注意を、イメラタ本隊の中樞まで広げる事です。」

再び上げられた、二本の指を遊ぶかのように動かしながら話は続いた。

「これは別に今まで軽く見られ、無視された事に対する子供じみた抵抗ではありませんよ。」

しかたなくアロアは頷いた。

何故この男は、同じ話を聞くのが三度目になっているアロアに対して、確認の意志を取るかのような語尾をつなげるのだろう。それ程までに、この教師にはアロアが理解力のない教え子に見えるのだろうか。

「先ほどまで驚愕の蚊帳の外だった中樞の者たちは、ここでやっと仲間入りしてくれます。ですが、この驚きはすぐ耳元で銅鑼を鳴らされた者たちほどの驚愕ではありません。『なんだ?』と言う程度のものです。ですが、それで良いのです。振り向いて後方の出来事に注意を持ってくれることに意味があるのです。」

やっと上げた二本の指を男は引つ込めた。その行為が夜の空気の中では、寒さを指に強いている事に気付いたのだろうか。

「音には驚かなくなった彼らですが、振り向いた先で起こっている事には驚くに違いありません。何しろ少し前に逃げ出したか弱き敵軍が、今度は数倍になって自らの軍の後方を混乱させているのですから。そして、彼らはその後方の混乱する軍の中にいる敵軍に対して、攻撃なり防御なりの構えを取るでしょう。」

講義にわずかに熱が加わった。

「ですが、ここが好機になります。」

序章 そんな小さな想い、の物語（８）

そう、「時」はここだった。

イメラタ本隊の注意が銅鑼の音になる箇所に集中した時、次々と敵がアロア達の主力がいるであろう場所に対して備えを取っていた時、だがアロア達の主戦場はそこではなかった。

その「時」アロアを含む３０数名はイメラタ本隊の更に奥にいた。ペイジユエ公の部隊を中心とした襲撃隊から離れる事、９０レスほどイメラタ本隊中枢へ近付いた場所へアロア達は進出していた。いや、そのアロア達の進出を待っての銅鑼の音だった。

だが、その音は本来注意が向くと思われる、敵本隊中心へ突出したアロア達への部隊から、いまだ最初の突入地点で激しい動きを繰り返す部隊へと意識を持って行ってしまった。

この瞬間こそ好機であった。

弓、戦力の増加、銅鑼によりもたらされた一瞬の、好機と言う名の「時」。

その派手な演出の中、息を潜めるかの様に進出していた部隊。だが、何より多くを持った部隊。

もう、あれこれ考える必要はない。

後は突き進むだけでいいのだ。最早残りわずかとなった先にいる敵中枢へと向けて。

そして、何も考えない事であれば誰よりも力の発する男の一撃が彼らの最後の戦端を開いた。

また大音が鳴り響く。

だが、今度は銅鑼を鳴らしてのものではない。

また人が崩れ落ちていく。

今度は馬だけを狙ったものではない。

明らかに人の運動能力の激退を狙った斬撃が男から放たれる。

次々と敵兵が崩れていく。

そして今回はその大男一人だけではない。他の30名以上の戦士たちが彼に劣らない勢いで敵をなぎ倒していく。

元来力を大人しく内に秘めているのが得意な者達ではないのだ。ここまで色白男の立てた作戦の元、か弱き愚か者を演じていたが、その枷がようやく外れた。今、彼らに与えられた指令はただ一つだった。先に見える赤色の大旗を目指して進むこと。それ以外は考えずとも良いのだ。

イメラタにとつての不幸は、この時初めて自らの奥深くまで食い込んできた者達の強さに気付いたことであつた。

大音量により注意を持つていかされた直後に起こつた、また別の場所での衝撃。戦闘中の極度に高まつた集中力を短い時間の中で振り回されたのである。その波打たれた思考では、目の前の衝撃を正確に処理しきれないのは明白であつた。

いや、彼らが正常な思考を持ってないようにするための数々の布石であり、その思考を狂乱へと追い落とすための更なる衝撃なのだ。

全てが手の中で踊っていた。

戦士たちの攻撃開始から数十秒と要しない内に、彼らの周りに戦力の空白地帯が生まれたのである。本来イメラタ軍とアロア達の軍による戦力のまだら地帯が、30名強の戦士たちの周りだけイメラタ軍の色彩が消えたのだ。

そう彼らは一人一殺では無く、一人当たり数人のイメラタ兵をそこから消し去つたのである。しかもあまりの短時間で。

その片方の配色が一瞬で消えてしまつた光景、自らが所属する戦力の陥没を目にして初めてイメラタは身の内に入つた毒性の巨大さを認識したのだつた。

イメラタが認識を改めた時、敵本隊旗まで150レス。

再びイメラタ本隊中枢より声が複数あがつた。

それは敵を迎え撃つとの先ほどの命とさほど変わらないものだったが、対象が変わつた。先ほどまで本隊旗から250レスは先にいた

小さき者達が対象であつた。だが、今度はその対象はその半分程度の距離にいる者達だ。しかも、それは「小さき」と形容するのを躊躇させるほどの力を有しているのは五感で理解できてしまう。

その一斉にあがつた指令は、イメラタ兵たちに身中の虫達に対してそれらを揉みつぶそうかと言う態勢を取らせるものだった。まだ虫達と彼らが王までの距離はある。それはどんなに足の長い者であっても一息にはたどり着けないものだ。最後の一息の距離へとたどり着くまでに彼らを押し潰せば良いのだ。いかに虫達が猛毒を持っていたとしても、数が違うのだ。そして数から来る圧力はその放つ猛毒さえ抑え込むことが出来るはずだった。

しかし、ここに至ってもイメラタは色白男の手の上からは降りられなかったようである。

敵を圧するための数の力を一点に集めるべく発せられた命令だった。だがその命令は複数あがつたのである。

身中の虫たちと彼らが王との距離はわずかである。その小範囲の兵たちの行動を律するのに複数の命令は必要なかった。一つの命の元、5〜10人規模の複数の小隊が動けば事足りたのである。そして、ここには一つの命を発する力を有する者は不足しないのだ。他の支隊ならいざ知らず、ここはイメラタ本隊なのだから。

その条件の下であるにも関わらず、この狭い空間で命令は複数あがつてしまった。

しかも、本隊に複数いる命を発することのできる有資格者達がそれぞれ発した訳では無い。本来ならその彼らの命の元、行動を起こさねばならないはずの小隊長達からそれは発せられたのだ。

何も彼ら小隊長達は上官に対して反抗した訳では無い。上官を無視した訳では無い。

ただ、待てなかったのだ。

目の前で一瞬にして友軍戦力が消えてしまった光景を作り出されたのだ。

その光景が、次は自らが立つ地で起こらないとの保証を誰がしてく

れるだろうか。自らの身を守るのは最後には自身なのだ。

色白男の言う通り、驚愕がイメラタの中でただ一つの感情となり、それから来る行為が全てを圧倒していた。

複数あがった命令、だがそれはあまりに多すぎた指令と、発した者が命を発するにはあまりに無資格者であった事から、力を発する事無く霧散するのだった。個別の命令は命の下った個別の者たちに対してのみ力を発するのだ。

全てを統一してこそその数による圧力。

最早それを行使するのは不可能となった。

複数あがった命令の内、最もイメラタ本隊旗の傍であがったものがあった。

そしてそれは命令達の中で最も多くの者たちを動かした。そう、イメラタ王直下の部隊である。もっとも、命を与えたのは王自身では無く、彼に侍る長身の男からだだったが。

「全軍、右後方の敵に備えよ。」

100人程のその部隊は命の元、彼らへ向かってくる敵意の塊へと構えを取っていく。

「王。」

その長身の男は命を発した大声から一転し、今度は静かな声でその傍らの者へ言葉を発した。

「間もなくここも戦場となります。敵は我らが防ぎますが、万が一の事もあります。御座を騒がせてしまい申し開きもございませんが、一時、王はこの場を離れていただけますようお願いいたします。」

静かな声ではあったが、それには若干の圧力が滲んでいた。

「わかった。そなたの申す通りにしよう。」

返答の声は素直だった。何より若かった。

「は。ありがたき幸せ。」

その言葉と同時に長身の男は身を前に折り曲げたが、それでも彼が侍る者よりその身が低くはならなかった。

「カリファ。死んではならないぞ。」

若き声が、それでも見上げる位置まで下げてきた耳にかけられた。

「は。」

短い返答だった。開戦より離れなかった男の影が、その場より遠ざかって行った。

その、長身の男の命による構えがようやく陣としてまとめられようとした時、そこが最前線となった。

本隊旗まで残り70レス。

序章 そんな小さな想い、の物語（9）

緩慢なイメラタの反撃をおかげもあり、80レス程の距離をアロア達はそれほど時間もかけず進むことができた。彼らが前方の敵以外をほとんど無視したため、前方一点へ攻撃を集中できた事も功を奏した。

複数の命をあげた小隊長達は結果的にその緩慢な行動のおかげで自らの命をつなぐことが出来たのだ。もちろんアロア達は、小隊長達の安堵の思いにまで気を配ってはいなかったが。

そして本隊旗がもう手の届くところまで来た時、初めてアロア達の進軍速度が急速に落ちる事になった。

「やっぱりそう簡単には行かせてくれないな。」

ムリエラの声が舌打ちと共にアロアの耳に届いた。

「楽して勝てるとは思って無いさ。」

初めてであろう、アロア達がこの戦で陣と言える陣と対峙したのは。その陣を作るのはおよそ100のイメラタ兵。しかもそのほとんどが陽の光に輝く銀色の鎧で全身を包んでいる。

「重装兵か。」

恐らくアロア達の中で一人として身に着けていないであろう、銀色の鎧に頭の前から足の先までおおわれた兵の部隊だ。一目にてその重厚さはわかった。

しかも彼らは100人程度とは言え、陣を張っているのだ。色白男の作り出した舞台から降りているのはすぐにわかった。

「構えろ。」

その声はアロア達まで届いた。

声の先に目をやると、なるほど実に命を下すには都合の良い長身の男が見て取れた。彼の表情にアロア達が作り出した驚愕への恐れはなかった。恐らく王直属の部隊であろう、この重装備の兵達を指揮するのに相応しい立ち振る舞いである。

それはアロア達の予測から外れた事ではなかったが、やはり自らが苦しむとの予測は外れて欲しいものだ。だが、ここまで計画通り進んできたのだ。苦痛を強いる予想のみ外れてもらうと言うのはさすがに都合が良すぎるのだろう。

多少の不満はあるが、最後まで色白男の作戦は当たったのであった。そう、そして色白男の作戦はここまでであった。

「戦術における作戦などと言うものは所詮、いかに最後の攻撃時に優位な体制を築けるか、と言うものです。最後の最後、全てを決める一撃を放つのはその場にいる者達です。作戦立案者ではないのです。ですから、私のここでの役割はここまです。」

最後の部分は少し声色が落ちていた。やはり、この男でも自らの力が全てに及ばないことを知っているのだろう。自らを無力だと感じているのではない、ただ限界がわかるだけに割り切れぬものがあるのだろう。

「作戦は机上で行われますが、その最後の部分に関しては机上ではわからない事が必ず起こります。敵首領まで残り100レスあまりでしょう。その場に作戦などと言うものは持ち込まない方が良いでしょう。その戦場の空気で決めなければならぬ距離なのですから。」だからこそ彼も机上の者で終わろうとはせず、今も仲間と戦場にいるのだろう。

「ですが・・・。」

とは言え、この教師は教え子たちに楔を打つのを忘れはしなかったが。

「ここまでお膳立てされたのです。よもや、最後の一撃を見誤る事は無いと思いますが。」

「で、どうする。突っ込むか。」

最も楔を強く打っておきたかったであろう大男から、少し焦れた

ような言葉がアロアへと発せられた。

「いや、重装兵に突っ込むのは得策じゃない。」

直接楔を打たれたのだ。ここで見誤ると後で何を言われるか、想像したくもない。だが、隣の大男に色白男の最後の言葉を伝えても無意味であつたろう。楔で固定される程、この男の思考は固くは無いのだから。むしろ楔が柔らかすぎる思考の中に埋もれてしまつたろう。

だから、楔の意味を解する者を呼んだ。

「ムリエラ。」

一瞬、停止するかに思えた30程の部隊の動きが再び早まった。

「来るぞ。前方へ、構えろ。」

カリファは再び声を発した。その声に反応したのか、目の前の重装兵たちがお互いの距離を縮め密集する体制をとっていく。幾名もの重装兵が隙間なく目の前の敵へ構えるのだ。それは傍目にも鉄壁の防御に思えた。

「よし。そのまま、来るぞ。」

カリファが三度発する。

彼が指揮する重装兵はさすがに重厚な装備だけあり、王直下の護衛部隊として編成されていた。だが、その全身銀色に輝く装備は一介の兵達にはとても揃えられるものではなかった。身に着けているものの高価さは、今こちらへ突撃してくる敵部隊と比べても一目瞭然である。それだけの装備をそろえられる者達、彼ら重装兵は皆イメラタ族の上位貴族の子弟なのだ。この本隊自体、貴族の割合が前線の部隊に比べて非常に高いものであるが、この部隊に関しては構成員全てが貴族であり、しかも将来の上位貴族なのである。

更には、返り血と砂・泥で汚れの粹を極めたような敵兵達と比べ、彼らの鎧には血のりどころか傷一つついてはいなかった。それは、特段彼らが綺麗好きな訳では無い。この部隊が戦場において、直接

敵とぶつかった事が無いことによるものだった。

最も、王の護衛部隊がそう頻繁に交戦する訳もないが・・・。

日頃の訓練こそ人並みに行ってはいるが、実戦経験の極端な少なさは戦場で隠しおおせるものではない。だからこそカリファがここに至っても細かく指示を出さなければならぬのだ。

カリファ自身は戦場の前線で戦った経験など覚えきれないほどある。それ程上位貴族ではなかった彼が王に侍るほどの地位に來たのは、戦場で積み上げた功によるものなのである。

しかし、その積み上げた功により、王の傍へ近すぎた感が最近はしていた。王の近衛部隊の隊長は、地位こそ他の將軍達より上位であつたが、指揮できる兵は実戦の経験も無いお坊ちゃん達である。

しかも、戦場においても王の傍を離れる事ができず、戦況を見守るしかないのだ。前線での戦術レベルで力を発揮こそすれ、軍師として戦略を描く才など大して持ち合わせていなかったカリファである。その地位は少なくとも楽しくは無かつた。

そこへ久しぶりの前線へ立つ機会がやってきた。

王の護衛たる彼が前線へ立つこと自体、軍としては喜ばしいことではなかつたが。しかし、カリファの血が久しぶりに猛っているのは確かな事だった。

恐らく、目の前の敵と自らが指揮する部隊とでは力量に大きな開きがあるだろう。それは僅かな戦力でここまで來たことで十分に証明されている。

だが、対応さえ間違わなければ彼らが破られることは無いはずだ。少なくとも負ける事は無いはずなのだ。

経験の差はここに至ってはとうしようもないが、その差を埋めるほどの装備と人数がこちらにはある。経験だけが戦力ではない。財力にものを言わせた装備とて、十分戦力となるのだ。

しかも、ここで彼らに与えられた使命は目の前の敵を打ち倒すことではない。この場を動かなくことが使命なのである。

なるほど、この場の勢いは敵に優位であることは認めざるを負えな

い。だが、敵戦力はこちらに比べて三分の一にも満たない。しかも、カリファの目の前に進出してきた敵部隊はわずか30人程度だ。その敵がここまでイメラタ本隊に対して優勢を続けているのは彼らの勢いによるものであり、それを成しているのはイメラタの混乱なのだ。

つまり、イメラタが通常の戦力、その数の多さに見合った戦力を発揮できれば敵を圧することは容易なのである。いや、すでにイメラタの本隊内部に進出してしまった敵部隊は逃げ場が無い。全滅させることもたやすい。

そしてそれに必要なもの、それは時間である。しかもイメラタ本隊が正気を取り戻すための僅かな時間。それさえ作ることが出来たら、彼らの勝ちとなるはずだ。

その時間を作り出す。これが彼らに与えられた役割であり、そのためにこの場で敵の進出を止めるのだ。彼らがここで踏みとどまれば敵の進出も止まり、時間も自然と生み出される。

踏みとどまるだけであれば、日頃の訓練の成果さえ発揮できれば可能はずだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（10）

敵は一丸でカリファの部隊へと向かってきた。

「来るぞ。槍を前へ。」

鏡の様な盾と盾の間から、これまた銀食器の様に磨かれた槍が前方へと突き出された。

「腰を落とせ。踏ん張れよ。」

彼が前線で槍を揮っていた時に指揮していた部隊ならば、ここまですぐに行動を強いる連続した指示はいらないだろう。だが、今の配下の部隊にはこれでも足りなく感じた。甲冑に隠れた部下たちの表情は背後で指揮するカリファには窺いようもなかったが、部下たちの緊張の度合いは厚い甲冑を通した背中からでも十分に伝わってきた。

しかし、ここまではカリファの命を忠実に実行してきている。

前へ突き出された槍には十二分に力が込められていた。これならば、こちらへ来る敵を貫くのに不足は無いであろう。

だが、その槍が血に染まろうと思われた時、敵は進行方向を急に変えた。

「やはり。」

思った事がそのまま口に出るのは、カリファの直情な性格故だった。

カリファとてこのまま敵が無謀にも彼らへ突っ込んで来るとは思っていないかった。ただ単に、重装兵に対して無為に特攻をかける猪突な敵ならば、イメラタ本隊をここまで混乱させられるはずはなかった。

「右だ。構え。」

彼らの目前で方向を変えた敵はカリファの右手へと進行方向を変えた。そして、来た。

幾数の悲鳴があがった。

敵からではない。

初めての实战で、数人が剣を合わせる事すら無く倒れていった。前方の敵へ構えを取っていた重装兵はカリファの命で右へと構えを変えた。上官からの命を素直に実行する。さすがに絶対的司令者である王に近い者達である。命を言われるがまま実行した。だが、やはり経験が足りなかった。

身を右に向けたまでは良かったが、その行動に他の者への配慮は全くなかった。若き重装兵達は皆個々で方向転換したに過ぎなかったのだ。部隊としての行動にはならなかった。重装兵の鉄壁さは集団であるからこそ最大の効果を發揮する。本来ならば今まで前方に対して横一直線だった隊列を、右側に対して並びなおさなければならぬのだ。「点」では無く、「線」として動かなければならない。しかし、今彼らは個々に動いてしまった事により、全体として大まかに右へ向けたものの、先ほどまで綺麗に描かれた「線」は複数の「点」としての強さとしが持てなくなってしまった。

そこを敵につかれた。

若干であったと思う。だが、わずかにずれたその隙間が敵の侵入を許した。

隙間をついた刃が数人の重装兵をその場へ落とした。

最早若干の隙間ではなくなった。それは大きな穴となった。

しかし、カリファは若き兵では無い。

「第二陣、前へ。」

40程の部隊が崩れようとしていた味方の内側から現れた。

それは、前の部隊とは違い隙間が容易に見いだせない「線」としての構えを取っていた。

自らが率いる部隊が経験の少ない部隊であり、その経験の少なさの最大の弱点が急な状況変化への対応である事くらいは、カリファは

十分にわかっていた。

その弱点を、対峙してすぐについてきた敵は流石にここまで来た者達である。

だが、その弱点を認識していたからこそカリファはそこへの対応を行った。

部隊の全力を持って敵に当たらせることはせず、部隊をあらかじめ二つに分けた。そして第一段階としてはその内の一部隊のみで敵に当たらせた。

そうすることで遊軍を作り、恐らく起こるであろう綻びに対処させる作戦をとった。

半数では敵に対する圧力も半減してしまうが、それでも敵を上回る兵数である。倒すことでは無く守る事こそ目的であることと、彼らを守ることに关しては最も力を発揮できる重装兵である事から、それは可能と判断した。

そして、悪い予測ではあったがカリファの考えた通り、第二部隊を投入する機会は来た。

方向転換により隙が出来た第一部隊と違い、この第二部隊は敵が突撃地点を変更する時点ではまだ構えを取っていなかった事、第一部隊に穴が開くまでの僅かいえども時間があつた事により、自らの力を発揮できる態勢を持って敵と対峙することが出来た。

「よし。そのまま踏ん張れ。第一陣は第二陣の後方へ。」

第二陣と対峙した敵部隊の進軍が衰えたのが見て取れた。

「うむ。」

カリファが頷いた。これならば勝てる、そう確信した。

敵の攻撃はまだ続いている。恐らくこのままいけば第二陣も破られるだろう。それほど敵の戦闘力は凄かった。重装兵と正面から対峙して圧するなど通常の戦闘力では考えられない。恐らくは個々の武力も一般の兵を大きく上回るのであるう。カリファの目の前ではまた一人、若き兵が倒れていった。

だが、それでも敵の勢いは一瞬で彼ら全てを滅するほど圧倒的ではなかった。いつかは抜かれるであろうが、敵の勢いはこの陣を崩すまでに「時間」が必要となる程度のもになっている。

そう、カリファが作らなければならない「時間」は十分にできる。敵部隊がこの陣を抜くころには、その「時間」によって驚愕から脱した味方が逆に彼らを圧倒するであろう。

時間をかけ守ると言うこの戦いに勝った。そう、カリファは確信したのである。

「第一陣。第二陣後方で構え。」

その思いを更に強固にするべく命を続けた。

若輩部隊を指揮するとなった時、カリファは引退を考えた。恐らく最早戦場の中で自らが高揚する機会はないのであるうから、と。地位では無く、より自らを奮い立たせるため戦場へ立ったのである。身を安全にするためではない。

しかし、生まれ育った民族が次第に弱体していく中、自分のみが安穩とすることに対する後ろめたさが、彼を未だに戦場に立たせていた。

心奮えぬ戦場が続いていた。

だが、立つことはもう無いと考えていた前線へ立つことが出来た。率いる兵は弱兵ではあるが、それをもってでも十分な指揮ができている。しかも、対峙した敵は少数といえども強兵である。

そしてその敵から勝利を奪い取る栄光も見えたのである。

カリファは久しぶりの充足を得た。

序章 そんな小さな想い、の物語（１１）

「カリファ様。」

耳元でカリファの平静を破る声が上がった。

「ん。」

カリファは視線を回した。

すぐ傍から聞こえたと思ったが、回した視線の先に対象の者はいなかった。周りの者は皆第二陣の激戦へと視線を落としていた。声は思ったより後方遠くから上がったようだった。

「カリファ様、敵です。」

再び声が上がった。

余程カリファの平穩を壊したいのか、先ほどより甲高い声色だった。

「なに。」

だが、カリファの心を乱すには十分だった。

今度は正確に声を発した者へと目をやった。

その者は顔こそカリファへと向けていたが、顔を向けた方向とは反対側へと力の限り指を向けていた。そしてその顔は、自らの表情などよりも指先を見てくれるよう嘆願する思いが溢れている。せかされるがまま、その指先の更に先へとカリファは目を持って行った。そして、そこで部下の表情の意味を知った。

「なっ・・・。」

短い言葉でしかその思いを表現できなかった。

後方に十数名置いていたはずの兵達が全て地にひれ伏しているのである。

そしてそこには明らかに重装では無い人影が二つ。

カリファに数秒遅れてその光景を目にした者たちは、またしても驚愕の中に身を投じてしまった。先ほどの報告者と同様の甲高い声

を、異口同音に影へと投げつける。

「何者だ。」

その様な事など聞かなくてもわかる。

これまで戦場で培ってきたカリファの胆力は多少の事で思考を停止したりはしない。

影がこちらへと駆け出した。

「負け、か。」

停止しない思考は悟った。そして、発した。

驚愕の混乱の中、健気にも影へと対峙しようとする若者が剣を前方へと構える

だが、その手は震えが止まらないようだ。振動が構える剣にまで伝わっている。

「よい。逃げよ。」

先ほどまでの緊張を強いる声では無い。年寄りが若者を諭すような声色だ。

「逃げるのだ。」

再び、今度はより大声があがる。

若者の混乱が声により一瞬飛ばされた。その一瞬の間に若者は駆け出した。

そしてその者の姿は波となって他へと波及していく。

「見誤ったか。」

もう聞かせる者がいなくなっても、カリファは声を発した。

例え自らが充足の中に溺れていたとしても、十数名の部下が倒れる様に気付かない事は考えられない。だが、今向かってくる者たちはそれをカリファに気付かせることのない速さと業で成し遂げたのである。

その様な力ある者達の侵入を許した事、見逃していた事、それが

敗因であらう。

いや、それを見逃してしまう程、第一陣そして第二陣へと突入してきた敵部隊の力は凄かったのだらう。それ程の力を有する部隊に、その誰よりも強いであらう者が抜けているはずがない。そう思い込んでしまったのだ。

僅か二人ではあるが、震える剣しか持ちえない部下たちにそれを止められるとは考えられなかった。震えを止めるための、重装による圧力も今は反対側で戦鬪を繰り広げている。今思えば、逆に敵との交戦によりその場に釘づけにされている様にも感じ取れる。

この急な変化に部下たちが対応できない事は指揮してきたカリファが最も分かっていた。

ゆつくりと槍を構えた。

接近戦である。本来ならば構えるのは剣なのであらう。だが、得物の違いはこれからの結果に大した影響を与えない事は容易に感じられる。

ならば、ここで持つのは長年己の全てを駆けて来たものが良い。

やはりこの槍は手に馴染む。

二つの影の、小さい方の剣がカリファの槍と二度まみえた。

三度目は無かった。

具足を脱ぎ静かに生を終わらせるのに煮え切らぬ寂しさもあったが、それを受け入れようとする自分もあった。

だが、こうしてみるとあの時受け入れなくて良かったと思う。

戦場の喧騒も血の匂いも鎧の重さも、全て今まで自分を育ててきたモノたちだ。そのモノに囲まれながら終わるのだ。これ以上を望む事などできはしない。不器用を恥じる事もあったが、これで良かったのだ。考える事が少なくて済むのだから。

最後に何か一言発しようとしたが、それはかなわなかった。

鎧で身を包んだ敵に対して最も良い攻撃手段は、前面へと開いた

顔面が喉への突きである。カリファも若き頃何度も教わり、戦場で実践し、若き者達に教えてきた。そして今、実践させられているのだ。

なるほど、確かに有効な手段だ。

最期の、音を発せぬつぶやきだった。

序章 そんな小さな想い、の物語（12）

直情なる長身の男から剣を引き抜いた。

血糊の量は多いがまだ振るえない程ではない。それを確認すると目を少し先にやった。

喧騒が大きく波打っている。

数十の目がこちらを向いている。確認こそできないがその目には恐怖が写っているのだらう。一瞬の接触ではあるが、彼らが戦場の経験が少ない者達であることは容易に推測できた。その中で一人気を吐いていた者の姿はだからこそ大きく映ったし、この部隊がその者に依存している事は嫌でも感じられた。

その依存の対象が静かに倒れた光景は彼らには恐怖に見えたのだらう。

喧騒が更に大きくなる。

戦場の中で最も聞く機会がある、殺し合いの際の怒声では無い。恐らくその次に聞く機会が多いであらう、混乱の声である。そしてこの混乱の声は戦場からの逃走と同位の意味を持つ。

最早右も左も無い体で、先ほどまでの煌めく鎧が散らされていく。

「次だ。」

隣の大男へ声を出した。

これ以上彼らが目の前で蜘蛛の子を散らす若者たち（と言っても彼らの同程度の若者であるが）に対して行動を起こす必要はないだらう。

目指すのは一つである。

「アロア。」

戦場の喧騒の中であってもこの男の声はよく聞こえる。

「やつらが逃げて行くぞ。」

それはアロアにもわかった。

目指していた本隊旗、十数本掲げられている赤い旗の中でもひときわ目立つ金の縁取りがされた旗。それが、遠ざかっていく。

だが、それはどう言いつくろつても整然と遠ざかっていく様ではなかった。

旗の元にいる兵達はおよそ20人、その中に周りの者達より小さい姿ではあるが金の鎧を纏ったものが一人。恐らくそれがイメラタ族の長であろう。敵の族長がまだ年端もいかぬ者だと言う事はアロアも聞いている。どのような事情かはアロアにはわからないものだったが、数ヶ月前に族長となつたらしい。

その者を中心に20名程度の一団がアロア達を背に走っている。だが、その後ろ姿は全く統制がとれていない。それはそうであろう。その者達の進む速度が点でバラバラなのである。彼らの内数名は騎乗であるが、ほとんどは地に足を付けての逃走。

本来ならば騎乗の者達のみで駆ければ相当な速度を出せるのであるが、なぜか彼らは徒歩の者らの速度に合わせようとしている。徒歩の者達の身なりが、大身でなければ身に着けられないものである事が関係あるのだろうか。

アロア達がたどり着いた、恐らく本隊旗があつたであろう場所には数十頭の馬が柵につながたまま取り残されていた。その馬たちに着けられた馬鞍の豪華さから、逃げ出した大身の者らの馬である事が想像できた。

その状況からも、逃げて行く者たちのあわてぶりが窺える。

彼らもこれほどの短時間で親衛隊が破られるとは考えていなかったたのである。彼らにとって馬に乗る間も与えられぬ速度で親衛隊が破られ、敵が迫ってきたのである。

いや、本来ならばもう少し時間はあつた。短時間とは言つても馬にも乗る程度の時間を稼げないほど、親衛隊を率いたカリファは無能ではなかった。彼は彼が率いる隊の最低限の仕事、王を安全に逃

がすための時間は作ったのである。それは僅かに1ファルにも満たない程度であり、カリファにとっては不満足この上ないものであったであろうが、馬に乗り、逃げるには十分な時間のはずだった。

だが、今、王を囲む20名ほどの兵は、そのほとんどが単なる一兵卒では無かった。かと言って経験豊かな勇士でもない。最も戦場の空気に似つかわしくない上位貴族であり、カリファが前線へと赴いた後に残った者たちは、その様な戦場の逼迫感を肌で感じ取ることが出来ないものばかりであった。

上級貴族である彼らの戦場に立った経験は、彼らの息子たちと同様に直接敵と渡り合う事のない近衛兵としてでしかない。今では戦場においても王の近くに侍り、剣を抜くことすらないのである。その彼らに数十レス先とは言え、一瞬を争わなければならない空気を読むことなど出来なかった。ましてや、自らが敵の剣先の対象になる事など想像すらできなかった。

カリファが王に対して残した言葉も、それを実行しなければならぬ、王に侍る者らには届かなかったのである。

とは言え、本来その空気を読む役割を任されていたのはカリファ自身であり、それがいなくなった後に残された者達に責任を押し付けるのは少し酷と言えるかもしれないが。

しかし、今彼らの背に敵が迫っているのは現実であり。空気など読まなくても、目に見える危機が降り注いでいるのは理解できてしまっているのである。

だが、ここに及んでも彼らはまだ自らの置かれた立場を正確に理解できなかった。

全てが騎乗の者となれず互いの速度に差が生じているにも関わらず、彼らは一団となって行動しようとした。そのため、本来出せるはずの速度を出せない騎乗の者達は、普段の怠慢のため一般の兵たちにはるかに劣る速度しか出せない者らに速度を合わせなければならないのである。

当然ここで重要な事であるのは、彼らの中心の者である王を敵か

ら遠ざける事であり、その王が遠くへ逃れる事が出来たのなら彼らも安全になるはずなのであった。

迫りくる敵にとつて重要なのは王と本隊旗だけであり、それに侍る者達など興味もなかった。

いや、正確には全く興味が無かった訳では無い。いくら戦場において無力とは言っても彼らは紛れもない上位貴族であり、立派な首級となるのだ。

だが、今の敵であるアロア達にはそこまでの余裕はなかった。王、と言う一点に全精力を注ぎ込んだからの猛攻であり、それ以外に振り向ける力などどこにも無かった。

ただ、侍る者達にはそれがわからなかった。

敵は自分たちの鼻先まで来る力を有するのだ。その力の巨大さは嫌でも伝わって来る。そして、その巨大なモノが自らを滅するほどの大きさが無いとは到底思えなかった。

この短慮への原因、その全ては戦況を正確に理解できる歴戦の者を自らの近くに置きたがらなかった彼らの傲慢さと、かといって自らが歴戦の者になろうとはしなかった彼らの浅慮にある。そして不幸はそれを良とせざるを負えなかったイメラタの歴史にあった。

（勝ったか・・・）

70レスあまり先で、遠目にもわかるほど慌てふためく集団の後ろ姿を視界にとらえてアロアはそう呟いた。だが、言葉には発しなかった。

彼らが今立つ場所はいい先ほどまで敵本陣があった地である。余程慌てたのだろう、陣幕がそのままなのは当然として、戦場には似つかわしくない煌びやかな装飾品が散在している。恐らく、族長かその周りの者達の私物であろう。この様なものを戦場に持つてくるなど、勝ち戦しか頭に無かったのだろうか。いや、所詮フィガロもイメラタもその中心にいる者達が考える事にそう大差は無いと言う事なのだろう。

その装飾品の所有者であつたであろう達の後ろ姿は、色白男が立てた作戦の目標が達せられた事を意味した。

その目標とは、本隊全体を驚愕に追い落とすこと。

そして視線の先の後ろ姿は、それが成功したことを意味した。

これでイメラタ本隊は完全に機能不全に陥った。目の前で驚愕の体を隠そうともしない者たちを見る限り、そう簡単に機能不全が治るとは考えられない。

本隊機能の停止。それはすぐに前線に伝播するに違いない。他力本願では無い、これからアロア達が前線に伝染させるのだから間違いない。

本隊の崩壊と言う驚愕は、それが間接的に伝えられた前線をも驚愕に落とすだろう。フィガロがイメラタ前線を破り、ここまで到達するのにそう時間は要さないはずだ。

「フィガロを勝たせる」と言う目標は達せられたのである。

だからこそアロアは思った。

しかし、まだ言葉を発するには早かった。

色白男の責任は終わったが、まだアロアには隊を率いる者としての責任が残っていた。

だからこそアロアは発した。

「行くぞ。」

まだ行ける。

そうアロアは判考えた。

二人は駆け出した、少し遅れて完全に霧散した重装兵を突破した30名弱もついてくる。

この程度のイメラタを覆う驚愕では、フィガロ本軍がこの地までたどり着くまでに正気に戻ってしまう。今、この地に立つアロアはそう判断した。机上ではわからない判断だ。

恐らくこのままでもフィガロは勝つだろう。だが、アロア達は正気に戻ったイメラタ本隊によって潰されてしまう。

彼らが正気を取り戻す頃には恐らく前線でフィガロが勝利を手中に

しており、最早全体の劣勢を覆すほどの力も時も有していないだろう。しかし、身中の小虫を揉みつぶす程度の力ならば、正気を取り戻した彼らには十分にある。

しかもイメラタ本隊だけでは無く、恐らくここを通るだろう壊走するイメラタ前線の部隊も追加される恐れがある。自分たちの数十倍の数である上に、手負いの敵である。手ぶらで逃げる事を良とせず、軽く捻り潰されてしまう可能性もある。

だが、アロアにとってここでの最大の目標はフィガロを勝たせることでは無かった。アロア達が生き残る事こそ最大の目標なのである。

彼らにはフィガロのために自己を犠牲にするほど、愛国心も、王に対する義理も、ましてや忠誠心もないのである。

そのためには、イメラタ本隊に驚愕から目を覚ますまでこの地においてもらうと言う、のんびりとした時間を与える訳にはいかない。目を覚ました時にはアロア達から遠く離れていてもらわないといけないのだ。

つまり、フィガロ本隊の到着後などとは考えずにこの場でイメラタ本隊には壊走してもらうのだ。その壊走のために必要な事は、イメラタ兵達に踏みとどまる事の意味を無くさせる事であった。

イメラタ兵が驚愕の中でもこの地に踏みとどまる理由はここに族長がいるからである。彼らの長がいるからこそ、この場を離れる事が出来ずに足に根が生えてしまっているのだ。

ならば、その理由を消してしまえばいいのだ。

その壊走のための起爆材としてアロアが考えたものは、だが、族長では無かった。

族長はすでに騎乗の者となっている。今は周りの者等の驚愕の中で思うように馬を走らせることが出来ないようだが、もし単独でも逃げる気になった場合、徒歩のアロア達との機動力の差は歴然である。見たところ子供と思われる長とて、馬に任せて走るのならば向

かう先はどこにせよ、アロアの手の届かぬ所へ行ってしまう可能性は高かった。

ならば族長に代わるものを目指せばよい。

序章 そんな小さな想い、の物語（13）

族長の一団との距離はすぐには縮まらなかった。

纏まりのない集団とは言え、彼らも必死なのである。しかも、彼らを覆う驚愕は徐々に逃げると言う感情に対して劣勢となりつつあるようだ。少しずつ彼らの足並みがそろい始めた。そして、徐々に追うアロア達との進行速度の差をなくしていった。

不思議なものである。普段より走り回っているアロア達と、戦場においてですら自らを飾る事にしか興味のない彼らとの脚力の差は比べるべくもないはずだ。だが、恐怖と言うものは普段の鍛錬などと言つ、表面しか覆わない力をこつとも簡単に凌駕してしまうのか。

これ以上は距離が詰まらないだろうという一点が来た。

互いの距離、約30レス。

その時、アロアの声が上がった。

「カルツェル、槍。放て。」

恐らく、先ほどの重装兵部隊との戦いの中で拾ったのであろう槍が、声の先の主の手に握られていた。

「おう。」

そして放った。

通常の者より少し大きいであろう槍だったが、放った者にはまだ余力を持たせる程度であったのか。その対象とされた者は気付くこともなかった。音もなく空気を切り裂き、槍は対象となった不幸な者の胸を貫いた。

ただ一目散に前へ前へと逃げていたその者は、この集団では数少ない浅民であった。上位貴族達によって大半を構成されていた集団であったが、王の傍らで役目を果たさなければならない者たちもいた。それは王の身の周りを世話する小姓や馬の世話役など、共に逃げる貴族達には生涯縁の無いであろう任務である。

そして、今胸を貫かれ倒れていく者もまた任務を負っていた。

彼は一人倒れたのではない。彼と共に彼の身長の3倍はあるであろうモノが倒れて行った。

イメラタの本隊旗であった。

アロアが狙ったもの。それはイメラタ軍の本隊旗だった。

これならば族長に代わるものとしての価値は十分ある。金の刺繍を施したその旗は長のいる場所を、存在を表すものである。

いや、一軍において遠くからでも率いる者の存在を示す役割を与えられたその旗には、長その者を捉えるよりも効果があるはずだ。遠目に存在を見る事が出来ない長よりも、全ての者が認識できる大旗の方が軍の中では影響力がある。

だからこそアロアはこれを狙った。騎乗の長とは違う。この巨大な軍旗、そしてそれを持つものが徒歩であることを考えれば、そう簡単に遠くへ逃げる事も出来はしないだろうし、こちらも見失うことは無い。

逃げ続けるその団の中で倒れたのは、旗を持つという不幸を背負った一人のみであった。

アロア達が槍に胸を貫かれた者が倒れた地点にたどり着いた時、王を囲む集団はもう100レスは先に行っていた。アロアが速度を落としたことと、彼らが前だけを見て走り続けている事によるその差だった。今から再び王を追うことは難しいだろう。

だが、アロアの視線は倒れたものが握りしめている旗へと向けられた。

握りしめられたその手にもう血は通ってはいなかった。だが、最後まで役割を果たそうとしたのだろうか、旗の柄は両の手で握られたままだった。

彼のみを犠牲とした一団は、彼が果たした役割を誰も引き継ぐことなくこの地を走り抜けたのだろう。

戦場にいる全ての闘うものにとっての心の拠り所は目にする事のない王では無いのだ。遠くにしか見る事が出来ないが、常に彼らの中心にいる本隊旗なのである。

彼らが長にいくら忠誠心を燃やそうとしても、目に見えぬものに対し、いつまでも熱さを保つことはできない。だが、目に見えるモノならば、例え対象が人でなかったとしても思いを乗せる事はできる。そして、それに対して自らの誇りを乗せる事が出来るのだ。

それを置き去る事の意味を解する者はその一団にはいなかったであろうか。

いや、もしいたのなら倒れていく者から奪ってでも、多少追跡者との距離が縮まろうとも、旗を掲げる役割を引き継いだのだろう。

感傷に浸るほどの間は与えられていなかった。だが、色は違うがその本隊旗を常に見上げているアロアには、見上げる者達と掲げる者達との心の隔たりに思いが行ってしまう。本隊旗の柄を握ったまま倒れた者の手を見ると、その思いがどうしようもなく込み上げてきてしまう。

だが、

「勝ったな。」

今度は言葉に出すことができた。

敵本陣があつた後方で、大きな声が上がる。

声だけでは無い、銅鑼も聞こえてくる。

それは勝ち鬨だった。

ペイジュエ公の隊が追い付いてきたのだろうか。敵の本隊旗が倒れる様を確認して上がった勝ち鬨なのだろう。

振り向いた先にはペイジュエ公の傍らに色白男の顔も見える。その彼に急かされるように再びペイジュエ公から勝ち鬨が上がった。そして銅鑼の音も続く。

これで前線までイメラタ本隊での出来事が伝わるだろう。

最早イメラタ軍でアロア達を意識の対象にしている者は無かった。彼らを率いる軍旗が彼らの視界から消えた時、彼らのここにいる意味も消えたのだから。今の意識の対象は自らの故郷の方角へと走り続ける事だった。

「ふう。」

ようやく息をつくことが出来た。

「カルツエル。」

横で壊走するイメラタ兵を不思議そうに見ている大男に声をかけた。

「みんなのところへ戻るぞ。」

自分の目線程の位置にある肩へと手を置いた。

「ああ。」

流石に眠気は抜けた声が返ってきた。

序章 そんな小さな想い、の物語（14）

アロア達の一度目の突撃が始まってからイメラタの壊走まで1ルムの時間も要さなかっただろう。だが、これは結果としての短時間での決着ではなかった。逆にアロアとしてはこの短時間で終わらせることと、初めの突撃をあの場合で始めなければ勝機は無かったのである。

一度目の突撃時は開戦からすでに1ルムが経っている所であつた。フィガロ王の性格からして開戦早々のフィガロ猛攻による激戦は初めから予想された。それにより、イメラタ本隊の注意も最大限前方の主戦場に払われる事になり、後方からの小隊の奇襲に注意が緩慢となつた。更には、本隊の前方と後方での注意の向け先が同一になるまでに時を要し、最後まで1000人の戦力を十分に発揮できなかったのである。

朝靄が明けきらない好機もあつたが、第一の突撃を「あの時」に選んだのはそれが第一因であり、全てだった。朝靄は単なる副産物に過ぎない。

この戦いはイメラタ本隊の壊走から始まるイメラタ全線の崩壊での決着となつた。だが、本隊壊走の瞬間、その一時に目を向けると、他のイメラタ軍の状況はそう悪いものではなかった。

まず、主戦場では開戦当初のフィガロ猛攻によつて押されていたものが、フィガロ王からのただ一つの命「目の前の敵を殲滅せよ。」で動いていたことと、自分達自身の統一されぬ動きによる疲れも相まって、徐々にイメラタが押し返し始めていた。いや、初めの猛攻に耐えたイメラタにとつてその猛攻を受けなかった左軍2000がいるのだ。左軍2000が開戦時相対したのはフィガロ右軍1000であつた。この戦場において、イメラタ左軍はこの時点ではほぼフィガロ右軍に対する優位を確実にしていた。フィガロ右軍は何とか

壊走せずに持ちこたえていると言う状況にまで追い込まれていたのだ。この行動が自由になりつつあった左軍を疲れが見え始めたフィガロ本隊・中央軍にぶつける事によっての反抗が開始される瞬間でさえあった。

そして、イメラタにはもう一軍がいた。右軍1000は敵軍が全くないことに警戒しながら（イメラタとて、まさかフィガロが天王山とも言えるクエルランスの丘を、もろ手を挙げて放棄するとは思わなかったのだろう。）昨日までフィガロ本隊がいた丘を登り終えたところだった。そこから見下ろせば、フィガロ本隊が横っ腹をこちらに向けているではないか。

態勢を整えて丘を下りだすまで、そう時を要しなかったはずだ。

そう、右軍の僅かな遅れがあったものの、もうあと少しで勝利はイメラタの手に落ちる所であったのだ。

だからこそアロア達は急いで決着をつけなければならなかった。決定的とも思えたイメラタの勝利を覆すために、彼らに与えられた時間はそう多くはなかった。

アロア達はその与えられた時間を1ルムと考えていた。

それが短時間で終わりしかも多少余裕があったのは、イメラタ本隊のアロア達に対する感度が想像以上に低く、そのため二度目の衝突時の反応が緩慢になった事でその後の流れも想定より前倒しで進んだ事が一つ。更にはイメラタ右軍が自軍の速度を自らの思い違いにより遅らせた事による幸運によるものだった。

だが、それでも当初はこの制限された時間の中での勝利は厳しく思えた。

「本当は、時がもう少し欲しいのですが、色白であるはずの男の顔は少し曇っていた。」

「難しいか。」

その曇りは隣のアロアにも見られるものだった。

「はい。恐らくイメラタの本隊までは届くと思われませんが、・・・」

やはり厳しいです。」

「そうか。」

敵本隊までの道筋は見えた。だが、同時にその道筋は相当の時間を要する事も予想された。その、相当な時間が費やされる合間にフィガロ軍自体が敗北している可能性が考えられた。

目を閉じて考えてみたが、それだけでは名案は出てこない。

「イメラタ本隊内の具体的な部隊配置がわかればもう少し何とかなると思われますが、そればかりは敵を目にしなければわかりません。上手くこちらの突撃地点となる敵本隊右後方が弱い部分であれば、もしかすると……。」

「いや、だめだ。」

目を閉じたまま、アロアは却下した。

「ここに博打は持ち込めない。これは外した場合、間違いなくこちらが全滅となる作戦なんだ。」

「……はい。」

さすがにこれには従わなければならない。それに、彼とて運任せの作戦など立てる者にはなりたくないのだ。

「足りないのは時間だけなのです。その時間を作るものさえあれば。」

分かつてはいるが、名案などはそう簡単に生まれては来ない。教師も生徒同様目を閉じてしまった。

「ペイジユエ公以外に協力を求めてみますか。もう150人ほどの戦力があれば、その時間を生み出すことも可能になると思います。」

名案とは思えないものだったようで、目を閉じたまま教師が発した。

「いや、それも難しいだろう。」

そして思った通り却下された。

「今回はペイジユエ公であればこそ話に乗ってもらえる可能性があるのだ。俺たちと同じ、イメラタによって初めに蹂躪される可能

性があるからこそ。でなければ、単独での本隊からの離脱となるこの作戦に首を縦に振るほどの危機感を持つてはくれまい。」

実際に先ほどペイジユエ公の陣幕内で、アロアはその危険性をペイジユエ公に十分に植えつけてきた。あれならばこの作戦に乗らせることは可能であろう。ペイジユエ公は自らの隊の行動に対して、アロアの言に耳を傾けるとさえ言うてくれたのだ。

だが、危機感が無い者にいくら言ったところで、王の不興を被る可能性のある行動を採用するとは思えない。

「それに、あまり大勢での行軍となると、敵に気付かれる可能性が出てきてしまう。その上、今立てた小隊だからこそ可能な動きも取れなくだろう。それではこの作戦の根本から考え直さなければならなくなる。」

二人の教師と生徒は共に黙りこくってしまった。

だが、この場にはもう一人、沈黙の蚊帳の外に置かれた者がいた。

「こら。何を二人して黙ってるの。これじゃ話し合いにならないでしょう。」

怒声が響いた。

「暗いっ たらないわよ。」

怒声が続いた。

さすがにこれには教師も生徒も目を開けざるを負えなかった。

「いや、ちょっと考えてただけなんだが。」

「そうですよ、好きで黙ってた訳ではないですよ。」

と、反論を試みてみる。

「知らないわよ。」

あっさりとはねつけられた。

「私がいる中で二人が黙って目を瞑ってどうするの。私に一人で話せて言うの。」

（いや、今一人で話し始めたじゃないか。）

二人の声は心の中で協和した。

どうもこの人は教師にも生徒にもむいていないようだ。教師にし

ては生徒が逃げてしまふし、生徒になつても教師が逃げてしまふ。

「悪かったよ。だからそんなに大声を出すな、ミリィ。幕の外にまで聞こえるぞ。」

取りあえず詫びの言を入れたのは、長いことこの大音声と付き合い続けてきたアロアの英断のはずだった。

「誰が大声女ですって。」

だが、それが英断ではなかった事は即座に判明した。

再び大声がアロアの頭上に降り注いだ。

「いや、悪かった。許してくれ。」

もう英断も何もなかった。謝り倒すと言う、人類が生み出した下策中の下策にすぎるしかない。

「また、アロアは謝れば良いと思ってるんでしょう。いつもそうやって。私は猛獣じゃないのよ。」

やはり使い続けると効果が薄くなってしまうのは下策たる所以なのだろう。

「わかってるって。だから、ごめん。」

「もう・・・しょうがないなあ。」

だが、下策とは言つても策である。なんとか彼女の怒りは収まる方向に歩いてくれたようだ。

「いえ・・・。」

なのに、それを否定する言葉を吐く者がいた。

「これは良いかもしれません。」

・・・とは言え、どうも単に裏切りへと走った訳では無いようだ。

「・・・何が良いのよ。」

だが、このお嬢様の気には障ったみたいだ。

今度は第三者の立場に立ったアロアが男を見る。祈りの色を映した瞳で。

「いえ。」

再び男は同様の言葉を発した。彼女の言葉に反応はしたもののさしたる興味は示していない様子だ。

「・・・どうしたの。」

彼女もそれには気付いたと見える。語氣に先程の怒気は含まれていない。

彼女も隊を率いる一人なのだ。そういつまでも、怒気を振りまき続けられる立場でない。

「うん。」

何かに納得したのか、頷きの動作と共に声が出た。

「・・・アロア。大声は良いと思います。」

「は？」

（この男は何を言い出すのだ。）

思わず裏返った声を出したと同時に、アロアはこの男の神経を疑ってしまった。アロアが無い策を絞って収めたモノを起こそうと言うのか。

「・・・なんですって。」

（ほら。）

アロアが首をすくめた。アロアの隣で収まりかけていた怒気がみるみる膨らんでいく。

「アロア、確かペイジユエ公の隊には楽隊がありましたよね。」

（俺を巻き込まないでくれ。）

怒気の空間から逃げ出そうとするアロアにこの男は話を振ってきた。アロアの体が気持ちと同様にわずかに後ろへと逃れようとする時、それが止まった。

（ん？）

「・・・楽隊、か？」

「はい。楽隊です。」

どうやらこの男は神経を患った訳では無いようだ。その目は先を見る者の光が宿っていた。

「ああ、あるぞ。王のお気に入りの楽隊がな。」

アロアの言葉からも暗さが消えていった。

「いえ、その様な喜びの音色はいりません。その楽隊には申し訳

ありませんが、今回は日ごろ磨いた技術はしまっておいてもらいましょう。ただし、その鍛えた叩き鳴らす腕力は十二分に発揮してもらいます。」

「と、言つと……。」

もう彼女も怒気は発していない。生徒には成りきれないが、先を知りたい探究心は隠せなかった。

「彼らに使つてもらう楽器は一つだけ。そうですね、銅鑼で十分です。」

「銅鑼か……。」

「ええ。銅鑼です。楽隊であれば10個以上は持っているでしょう。」

もう男の顔は笑っていた。

「それでいけるか。」

「はい。これで時間は十分です。」

「そうか。」

アロアにも笑顔が移ったようだ。教師が確信を持つて教える事に対して信頼を持つて頷く、それが生徒の役割だ。

「あ、でも大丈夫でした。楽隊には、この戦の後に日頃の技量を発揮する場所が用意されるでしょうから。」

生み出された時間はほぼ予測通りの1ルムあまりであった。

そして、それは後から付け加えられた時間を除けば、ほぼ余さず使われた。付け足された好機もあったが、それも吸い上げる事が出来たからこそその勝利であったのだろう。

後にこの戦いは「ランタンの戦い」と呼ばれた。

コルドア内部へ侵入しようとする異教徒勢力を完全に駆逐する事が出来た戦い、長きに渡ったイメラタ族との争いの趨勢を決定づける戦いとして歴史に名前を残すことになった。

だが、これは後の話。当事者であるアロア達にとっては、勝利の

喜びと共に、自らの力が、単独では何もなせない程度である事を再認識させられた戦いに過ぎなかった。

だが、主力同士がぶつかったクリアランスの丘付近の名では無く、イメラタ本隊のあったランタンがこの戦の名として選ばれたのは、「歴史」とは見るべきものを見ると言う事なのであろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4914y/>

アロア戦記

2011年11月27日10時03分発行